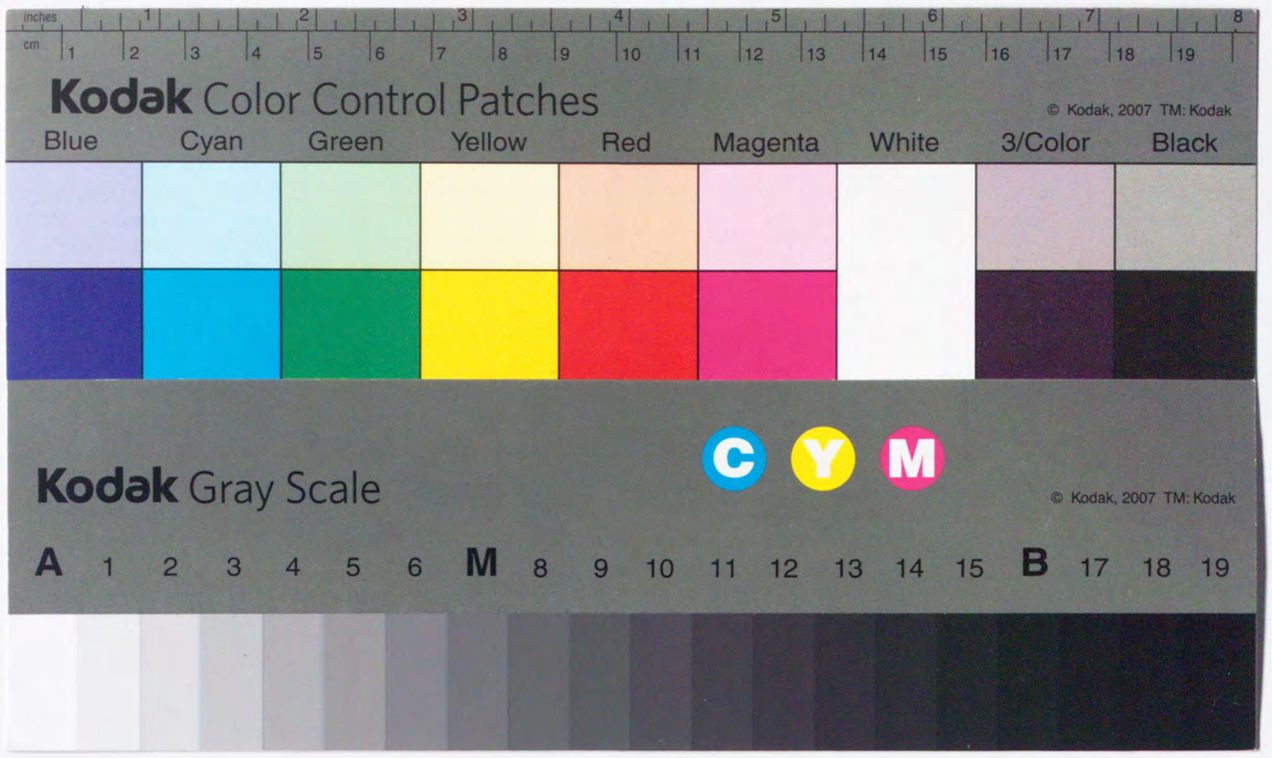

Kodak Color Control Patches
© Kodak, 2007 TM: Kodak
Blue
Cyan
Green
Yellow
Red
Magenta
White
3/Color
Black
Kodak Gray Scale
C
Y
M
© Kodak, 2007 TM: Kodak
A 1 2 3 4 5 6 M 8 9 10 11 12 13 14 15 B 17 18 19

新うす雪物語巻二

[illegible]

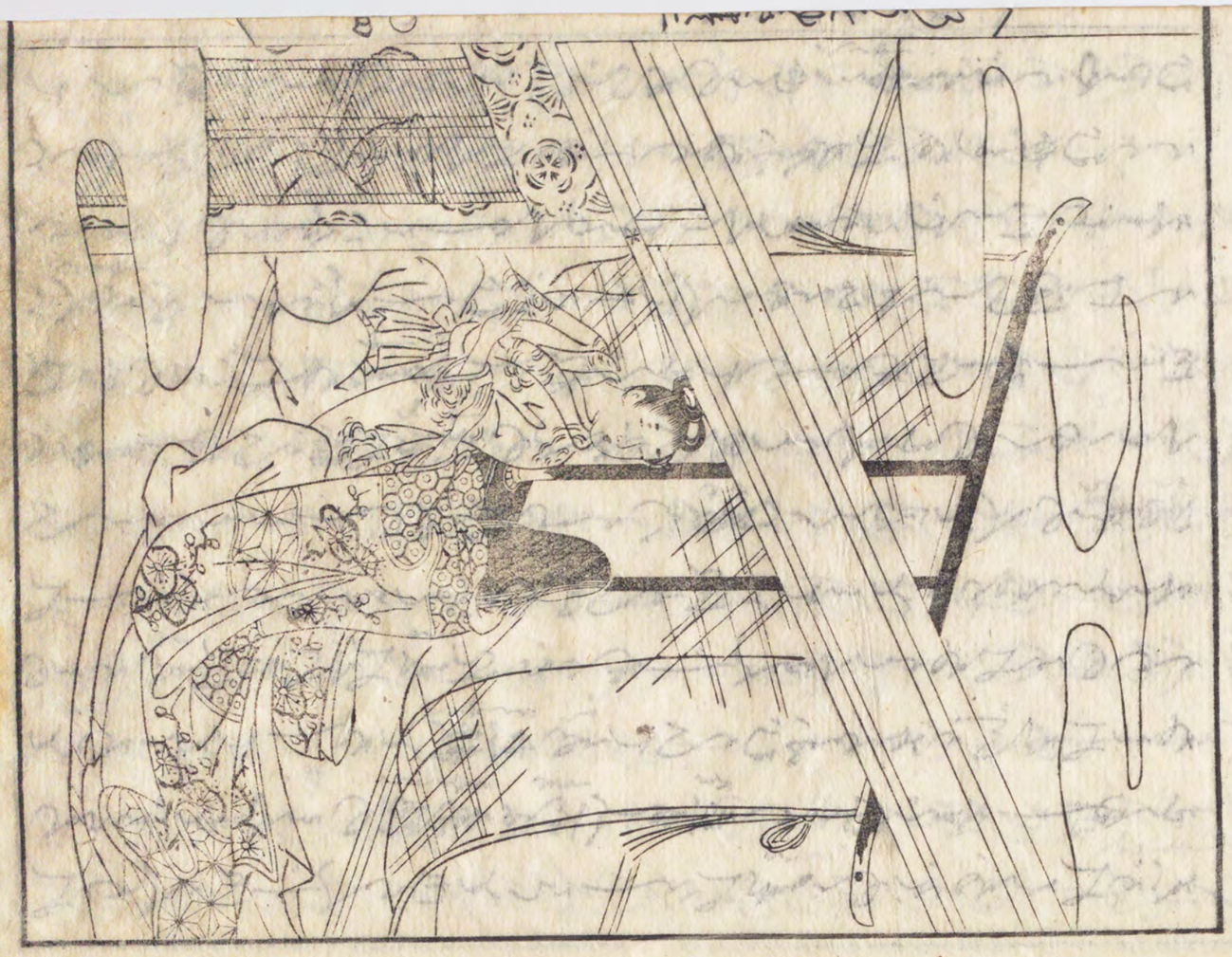
さてもそのゝちより文つかはしけるを姫と
御返事もなくしてうらみかくしけかく嫁ざかり
まめやかなる心ざしを様にかよはせどもいさゝかにうき
御心ざしのおもかげのわすれかねて物おもふいよいよく
おもひは御身をかのもしきみだれあつまりてあり
よしつね殿はものうれしれ
ありおもしやされき物と鰍澗く文一筆かきて思ひまか
このんとあはれしもし下されし候くは御心へ御すまかそて
むかしぬしの御事御かへしもにおんしはゞかりかゞ
よのかなあらたましいはれがたく中むつましみこひどのみ
こゝろは御もし十文かくあらしいたれたびたんのうしと

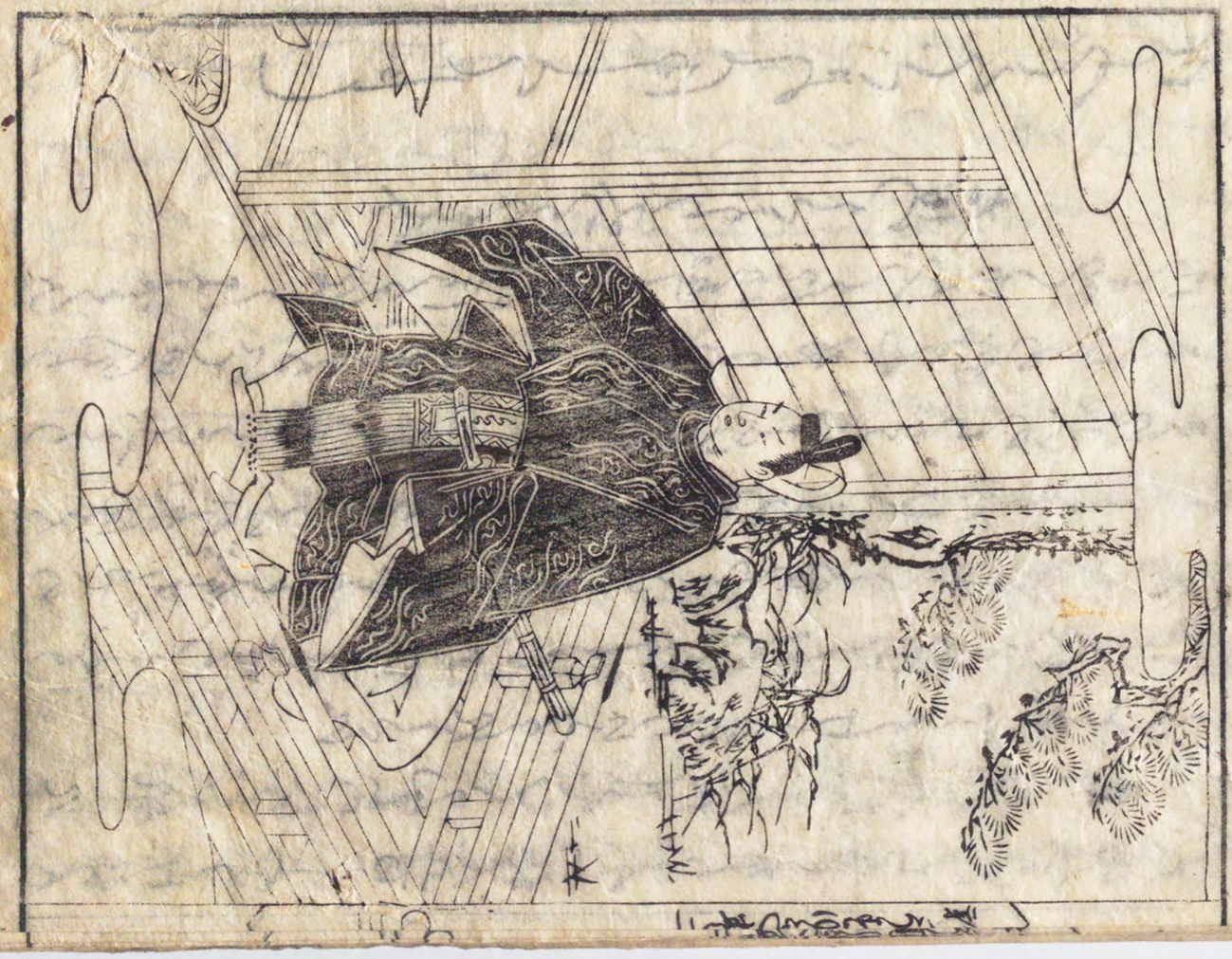
ゑいざんは辰丸とて十六才なりそなひしはちご
きくかのびこゑよおもこがれて身のうごとかさなり
けるにござい(ぎ)ましとかさけぬられんころもあされぬに
おかしいとある夜ふと山寺の弟子をとらひいてはちごを
そのびよせいはらていかゞしおりてふと山寺へはいり
このよし見付ひしにさりながらうつくしく
やすんはゆくらとこれはぜひくこゝまでしおふさらやいこ
ござい(ぎ)ましておよりひどくのゆへりとかゞろさうくだり
ちご桜と咲そめくかゞらなきもれくしも咲そよふと山の風
るかるゆゑもしりなへど
金はだまづは花とも都にもふと山風にあらゝまじになり
よこやなしのとうくだり

ちご桜のおりは花桜も梅と木陰は枝は猶のなれども見ゆれ
うかりにいかい勇ん面なりてあさけぬかれになさいゆびのの
おちごとおいさんへとくりそしけなひしとしつや
みくうぬてこそれいてそ今の世にてくといくるへ
ゆへ〳〵そそしさなまとすこしいたさけの
ゆへよのくれはつまやて瀧縁になりかなしいしもし
あかれてゐのんはなけわもれれそもぬれいいうゆねなけさと　金米
うとも見れなへし
なに絶しはなし人のおもゝふ花からしあまこれ
うきとわかりと結はなしたしうぬとかは
なくらびえてしとやんはおけすりのかせて

へもとげんぬなくむくりしてへやおかを
下さりしまゝ敷るうのきくはん△
うれなとれしきりふそんへし
しそともかもぬみちとてれみなうほい
ち来りけりけるりしもめしおれ
そのくれさけれし都しよれなしこと
うらむさきしかへくしゆし恋の涙
けらだふなしわきれしうふれなくふ
しけをすとしもしてゆしあそぬうれ
おのりじおく紙し鏡へしめしうち称て

けりてくてくさらゆしてしし
右膳のうさよりえつりりとなす
けらあくけんつられけ与え恋のけりだしては知るとひ
されとの作らや有よりわせるさひくるかれて思ひより
されふいのちされやはいれしいけるそのそうらぶとり
ちとそしゆけくまの乃さにもうくろけがふれ糸渡ぐく
いのち法つるぐるめふくひりもや忘ともとも命わりての
けとしにくれわくけのい渡しめれなるいふともせろしやう
るいと乃一とうけくありひつれろうにれ
忘しなむ命ぬかどはわりでもむくれ気のためぞう肌しれ
見ゆへまいのちなくたりくへば一称ん五百しやうけ称ん



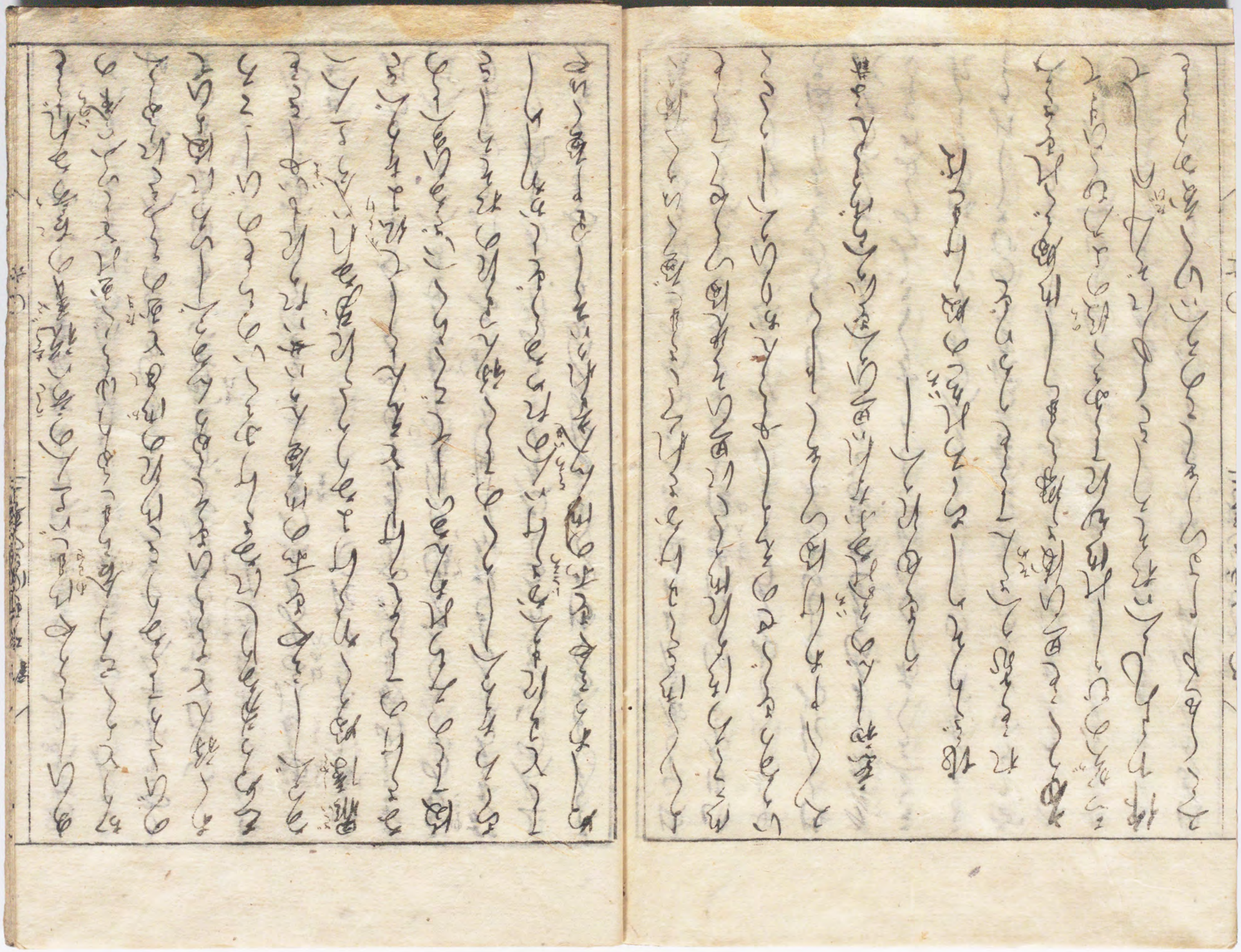


ひつきやうごう生く世々のあひだつきせぬうらみふかくて
うらむ世もなき身となりや命にしたがへばむかしの縁なれ
そもちはらでこゝまでくるしきをしるは今この世より
うけ給ひつゝせめくるしみてやさしいむかしのしやうにんは
はやしし八十にあまりてさくれし智者なれどこの世は
くもとこゝろのまゝみてし思ひのきりんの浄土れ縁がひ給しませば
富貴の人と見えくは夢のうちれるのしきことのひ
そもとのなる女ともそれ波よりひのつらいとさとり志だしれ
うりのかれなうしらんじある来るれ名にならるの
なきれもがうちするふむらひて在想観とあして心ろと
もらし給ひよりたちあし所よ京極のこゝろもどところ
志かれなるかぞの来れるしきとはらんじれうへりれ

はり給しはらく波の糸見んのみをとおけらまことに
此上人はめ給見合掌して立かりへもおくろ給ひ
たましぬうちもてしかふはらく波のあしと見えてくるて
上人の思ひいたんや感しこともかりけまいもぞれ舎利
立かへりかりけにむかひまりてもとまはれの面かけ
もなかれざく称んぶつのて念うちにいそよしてひとつ
大いさとはくでをりありてしやんとかくさむらうと
こは山のくさとおがむましいとしんもうれ給ひなかや入れ
月おうそひけいままれぬれたちひたは給ひし今生れ
そらう称んをなましざうく後世のさとりとかるべけまいは
せらくこの思ひのうれいろとこゝやもあふ一念ひやあげ
給ふひのんは浅もしもしんのやまく臨終とともせぬやし思ひ

後ゆは八字の名号のごとくうしいわづくさ給ふにわたく
しとのつんに右うけらまし京極の中納言ハ後のり
たまししとひびやうくさくぬよりおけまじはまりあさとの
くらとのもとしに一日一夜ぞくあれたりけるかしござふ
わとひいうすう名を唱ざやうおやころしこさ屋らんと
おやしてうりとこやまとあらたらりふ給らんしてわまとい
志かれしるまんのりへるさふめ往生ありやしし上人の待り
給そいいうふ後よひてこれまでこさぬけたりかるべし
わまし給へおもてる後よりて後の世の侍と菩提のうへすり
むくすふ念しおさけのことぞとうけて懇ありへさんと
おかしめし上人これへしのきまじけまらはまおくと
ふるひてみもとのまへれ念んに教き後づる御よしとりわる

てらぞとおくゆかしくしおはおしひたりつるやまどうちぬる
上人のいつぞりあるねるしことのかどおくられあと
かそろしうてとゆかりしめしられいみどれうちより
雪のごとくしるゆき返しおさせかへいは上人は
まとしのおきしたやうあうまふくこゝろやまとところれ
かく見ふきりつれて
御念仏子日のうふる玉ぞふるしまれはうるふゆらくかなと　新古今
こやまと示ゆ后し
いざゆるい誠の名号んずて誠といざるへゆきぐおのと
かやうに上人のかんとおくさめあひたまといは上人もゆるとひ
てかれしむすのまへとこえしはるひの念さりたれて
あがふうへりてそのはなめぐれれまうしやうとうげ



あひしらやはましいは上人の云ハ説義の古今あれども
ありとらくごり合ゟましかれゆらくもれをしいふ八命の
のびさりてきありことはれの御をとぞのもうくされかまん
あく孫んとたらひまそくぬりんあかるべしいわに後よひて
たぬりあるのりしにみさけあさくいのちとのびしてろ
あらぶしろやもぞ不の御座人のハ女ハたりれもいやしきを
罪障始くかけよみりてれあきれハ今上人へ
まさけのてらぞりけしをえんとして仏まさりべき
後下しのみちれあんまいしてぞくらくへいざるひあへとの
あろたるへしりくのてしく孫んつまれのおそろしさ
てしとまにまへかさけハ今のためあるもぞしかわしめ
ぬしあるまやもぞ不の御ん入きれりハそし里中座くいや

よくしはさしほけかされらてしさまし座くいりく清く
御てろはれ御てさに思ひそ兎角いらやてしも
いりあるもぐせのえらししそんかりひんしらく
又くやわけ隙りてそしやし
慈和しんの名めみあふかたれハ思ひらんまいらはらるらん　子誠
うきもれらへし
垢ぶりそりしちころれるとの殿りけまとば
れこも乱りへきんてもとかりぞ
ありくこと思ひ後さ帰りまでし御帰ざれまさゑみ
三つかゞのひりしれ御もれてみもく後のよみむくひまて
仰わりよたへハおそろしさしもにぞ中へしして
みくしもやしまりつきしこのうへハいく度かりしも

ゆゑころもはだかり給ふかたちもしらじかうゝ
あらはれわたる御身のうへはかくれなし心(こゝろ)ざし
ゆきさくはけとはなし勝らしばこれをびくはなれさかし
ひとりの夜もたゞきりれのおかくしゝきのおぼさあ
おぼしいふしへだゝりけ天下(てんか)にたゞのむさしれあき
ところたかはとひとひしわれどりんのあらしれあかしれ
こゝろよくわれにこそけさきみのやうめでたく
雑色(ざふしき)ともうびにさせ平家(へいけ)となりしせらるゝこの心おもんみ
はしられぬえしいふおやくしきけざいるのとよりはさ
やまとくしあけたしなれいみしおいへるりたまりをく
させゆかりひとつはなし安倍(あんばい)とはようのそを姫やくめでたし
はこし庵よりはさいふうつかのあやめのまへにん様

うけしく姫君にたからひふたりむすぶよしめでたきうへ
おぼえはわうびらはあやめのまへとつうつゝたへしあれどもと
すりはさとけ女房(にようぼう)とかくしてはさらてゝかならぬあらんとかへ
わるにしてどうれ女房(にようぼう)とおぼしくしつけしてりはさとれ
あんまけるよしさせあやめとあるなりかねらんされしくし
さうらひけん糸とともひと月と孫ゝにとさらうるな
すこへにわるしいゝやうとさゝせつまやうでゝの
はごゑさし、よりはさとめられてよひとの御わつべふ
あやめのまへとわかさうへしげさんのうらとまらさせ
そのくさうりさんちがはなにせよしのせんじいつきと
そさらかりのせらりそきらいおくうてやくじかりの
まどうかれがよりはさしとめうきひいつきとおやうと

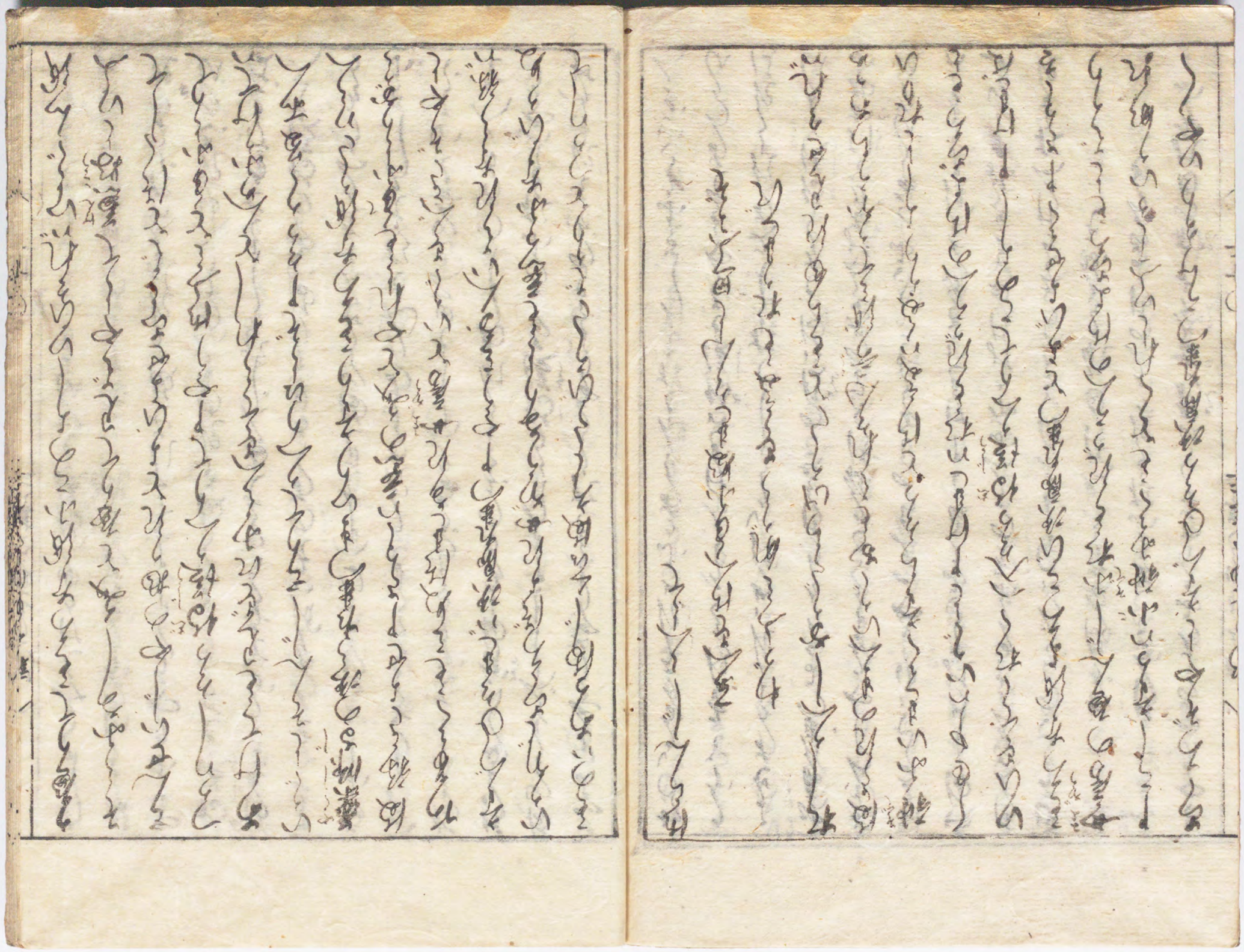
ひくあそばしてちとなし玄叡しめうらうらうとひゞく
おさられぬ事も見るはさきいはざきうことゝおもふらんと
よそれけほしいよりはさいかりかへど
はらぐれはきるへの事ことは吹きうして
いはもとおやわしもそれぞれわつく殿
ともみてまじいはしろしのおもしろされたまんどくよの
おもりのくんにみせんするおやめれまへ乃まゐてとちり
これにそうく慈ふおこされしあんちが盾ぬ体よまて
わきよしがりより体さいめしとやくゆしや乃名は
あくはのことかくもと一首のうさにて見んがうるさら
ねやめれまへとありしいめくたりなくきとめし
かりとそさとのてけしとひおけてふくるけれ

こゝろもなくてうとれしのけふこそたえだえにてさて
めでたく平家(へいけ)そのゝち座中(ざちう)の人々やわれ
よりなさぬこともなくかはりびはおやかれまへと
ありしいはんがくわれとも弓そり乃弟(こ)として
女房(によぼう)とこそいひしいはれなり安倍(あんの)検校(けんぎやう)のうちが
なさるべしとやけまじバこそうたのしみさるしいふかく
さるいはゆきてしはいふその座(ざ)の十ケ(か)て
検校(けんぎやう)の二十ケ所(か しよ)よりもおやかれまへは大切(たいせつ)なる人とそ
やよりかりそめの座(ざ)の御前(ごぜん)の上人(じやうこうにん)のそだしられ
つがらはや女がうありてやうやむじれおやかれまへ
内のこ美人(びだん)へかくなげきしても十二人のうちとの入る
ゆゑかしそれかどの女房(によぼう)と十ケ所(かて)にもうかくろかどに

みつ縁らまはりて今の早田(わさだ)の米(こめ)なさるれのまの
うつくしきおなをなからんとしては日本(にほん)ぐにゝ
かへさせのつ絶しとやけうてろかは枕(まくら)をあげて
そのなされのまへいはれしされわりし深しゝい
いは内でありぞや俗(ぞく)世るいは田舎(いなか)人の流まと
おそやとまと内にしそ内りまれくてものうへれ
むつしかり内くちとそうかりわかんしたとひ盆り
なはくせこの村てなとうてでの人々ふみそらかりて
見えやはへいはめし人の其(ちう)なちらではおりし下(かう)村(き)の
ちかうりとたのはいろなうく人なかの月のよふみをと
てげく琴(こと)と云ほかへいざうくしこらかまとうてつるそる
ぞんのそつまよりかのふ見えそうよそかひいるかる

去りしんはまへもさそろ成ようひせんへもつうきれと
うしなひつ亀し女御ごきけれんもとゆつりそせたれ
よらうとされのみぞしよりきんや別当のにけるに
心よりしうさるしのむきを成れ称のけうらうひと
ぞんしゆしぞやうけこもうたゞはいしようれ終しだぶ
こゝろうれしくけるみしざらりれおまりれもしろく
御かれんはまづ引出物にせんして六ごの娘小袖
十そき缘にちんの成ゝうとそへて侍従のつがひにあり
ところなれちくねよりてけるのし中へにまれるが
やましいなとりまゝこちよしてゆき恋のやまもひが
入けりけるまへにそるてくとるぬのむかりすへきを
その成されのまへとそれゆしにかきうらしてあつべし

さよつゝやうえのりしもしたうえそりしものぞてこれにゆうりせ
成りてきへしとゆきのしろ侍従もてろふれきよへやう
けるぬく御にあるのぞしきうれねしのおろんへを
わゝしてかうらのがなうへしし思へどいなていそぐ
いのちなともとこゝまでうれめふおりんしわそろしさふ
おゝふしぞけきさ成へゆしてりん成のしせんもそうへりうろ
さそてこゝろおはいそのおく今日よりゆいみちら侍従のさへ
けきさうかとなくつそ恋んじれそしとせめけゝとば
侍従もせんかなく成されのまへのうへゆれきのび
やふふうやうくしやしてられだ成されれまへいわだゝかうれ
好きひのかゝろきもれてしとやこものうそしろしきも
おしくみんけつゆへ侍従をひひょうへさしてしぞこまく

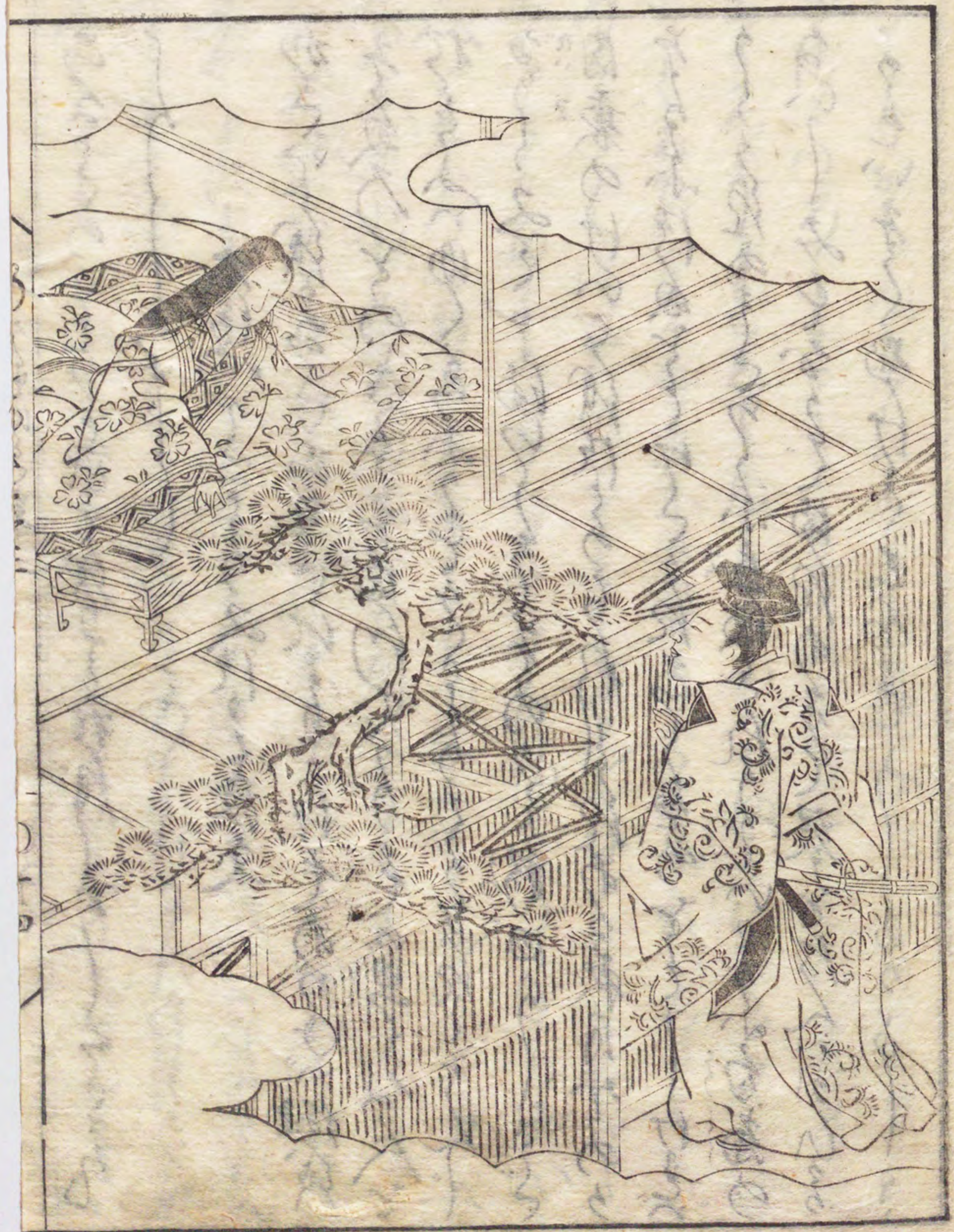


かへりてこゝろたしかにこゝのよしいひければいつくしんかは
そこふかくしみとおりて見ずやして兼好（けんかう）といふ
ころせいじやのねられとよひよせさしもとはかくして
つかりしかろ御堂（だう）へまいりてすやうけふとまふかうて
あけてとも見れどれかくへきそへられしとへめにかけては
いかにしそんじたりそくへりはしぞすかくの宮あへ
薬師（やくし）るの浜かた来つまいりそわりこゝろたしかさとりくん
御孫さまをせやさらしい恋のみとやれしも手（て）にかゝりかゞら
かなしくもとこゐはましきれ女房（にようぼう）といゝさへさしざやと
さんざのかまじい次郎丸来つやうこゝろへいそれたし孫ハ
いかりじちうなれ女がうかりしも恋るにたびかぬ
そのいあるはじめ御なくしひろくだかりとつかりして

はらんじくへりて
なへをはへまか小殿まりへし思へきぞ
わがふくも我かくもとふみもれりしれ
れしくへしかゝしかけうくとこちあれかせぞれバ
御さんのまへいうでおもてれ恋かゝそうかうらねかめ
神（きぬ）にいまくそらからとはるぬいくぬかりかしれかりひ
くむやいでとすけましれれとれがうへのはよもろもと
いひもてれく入ったる御堂（だう）へまいりてこゝのしすけさとば
まこゝろたゞれよろこび次郎丸来つとよびよせくれさうとき
女房（にようぼう）の悪（あく）んじふれとれがうへのはよおろもとてうり
しこし大するハ小袖（こそで）にかくこともくれしいへしかいうかれ
あてらぞやしさんかめうら次郎丸来つうけかりいやく

さやうのおもむきハなくは新古今十躰の内此分に
はかりきざまれたるうへの歌よめるを
わが歌ハたゝの歌又れうき躰も
此ふとさのこゝろハひとりつ後ところそらはへれども
歌よむろもあるふそのうへふかられ歌又とうき躰ましはふ
い侍しかれはさゐくゆしやけまいこと躰たはやさしくハ
そのさいハゆふやのみちのをわらとかうしくふともわうびたれ
たかしやうかしくこゝろ躰はくつもの名ざやは太刀と引おほふ
次第に其うまうりはなこの後ハ侍しなく侍従とよび
よせあはしれいめ侍いうしてれじし又あれられは
うかとたかれくろうみけまいば侍従ともいやとそあるひ
か〇いゝあかうれゆふあたんとれそろしさふかさいかゝ人

まけくてうり将くいおとなし次なりけまいばそれくして
かうぶりをまうへとかくしを侍たれはいかにさんと
いろくおんじわしまして古人の秘要をうつわかして
女房とそしひとゝの下しのたくこれしそかうむら将軍へ
後いりなんやもんぐうんむかんのんあうよしきんけんし
けまいはもんぐもんとひょしさこれもひしてものかまいね
みちられハ和歌んでくへの風雅へでもんとりすつして
ものの事さはれさいのちをまてんしれとひさしめ三月
木七日のあかつき女房子ことハたれどもみちのりぐし
和歌ハもり後ちよりハぼうしもの心へかくありぬおもしより
正為伊豆守の付古んや利安むかんのをそて御前に
より将軍ありしろてを下さうりしいはくの雲井を



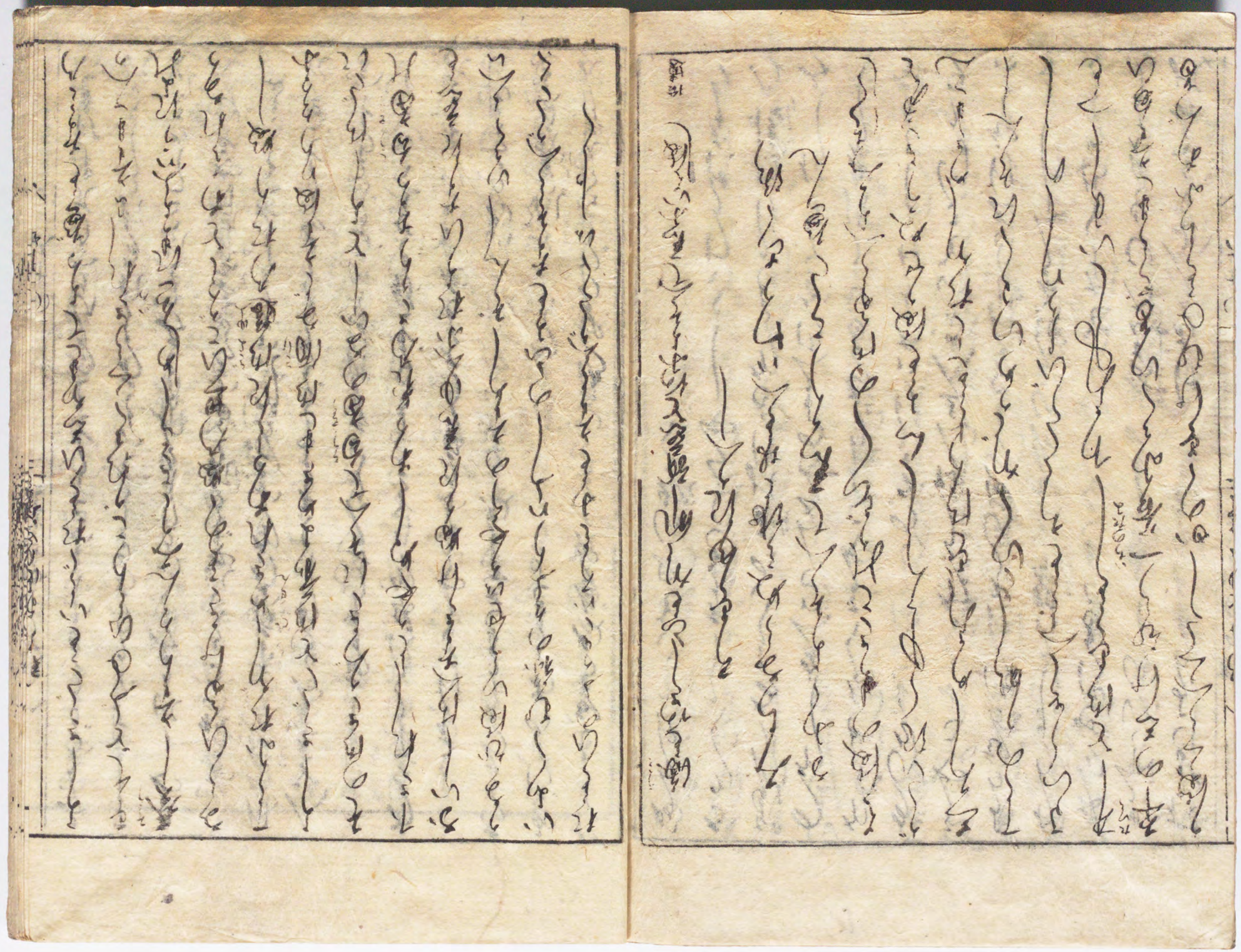
殺しつれどかんやと弟はおくれとこそかなしきやうく
あへしぬるの事へ女房につげてくやしとのひとり
入りて中やうみえんとのうけたまはりたれば付へ
ざんしかくありし小家にすていつとはしとうし
家の火をつけむかしこのよりとおもひもふみの
ましほいもせんなりふでれのく命たえし夜いはしせ
むかうれたちてあるかれいかんやと今は名とり給ひ
なれしそれのじくなりとりれどけひつくしたり
あひしみりこれといひしきにも我いてす
かつらし女房いりし東女のかたちと侍るとりかし
いされよくむくの事うく女くをとめうき見しれて今
まひしきしひくしもいまとみちはほしらくらしは

あまたのこゝろをはらしたればしめしくきこえ
しんしやうし

右衛門のかうより又ためし文

かくいにしへのことあらさいればけてあるは〇が何代
きみ女のそのきさきを御門だうりそは思ぬ人と
わたくしはいゆくゑふうきどうくよりなるにとさんし
かしこみて申ていそのうへ我田よしさき
内裏(だいり)のけいごはなはあらはれ給ふある秋月のよ
なるに法皇をとりけしくうたはしてさまのをとしけまい
りしきれのまくいつらに立寄(たち)られいらるゝ向庭(こうてい)の
おひしみをかうぶ御れわが琴(こと)をたんしおひる
よのもいきく鶯けくをかはしめるをいさ

わらしむからぬ色れなきのいみをわりてこさんけん
おぼしのあくもしきむよれしてしかるは義貞(よしさだ)と
ちよろうまいあまはふへいと波よりひるのてくちし
よふもあけまつやかふの色のてとも西紀(だいけ)いまくとそれ
あなでくに琵がくとさもせもそれにそくねの
ふくしかまりせんこたれ御心いかがうちまで
んとそのかゝるしそよしぐくりどとあさ色に
風の便(たよ)りふ下荻(こうかぎ)おかなかれしてえしてしこる
我袖(わがそで)のかゞしやどの親(うば)かふよしも雲井(くもゐ)の宿やまとしん
りくしにまえつくりしかれどもかうしはこつめされん
てしもそでりあるもそいとおもれらなれたしきれ
みんなからあふいかるどもつひくりてやけましい

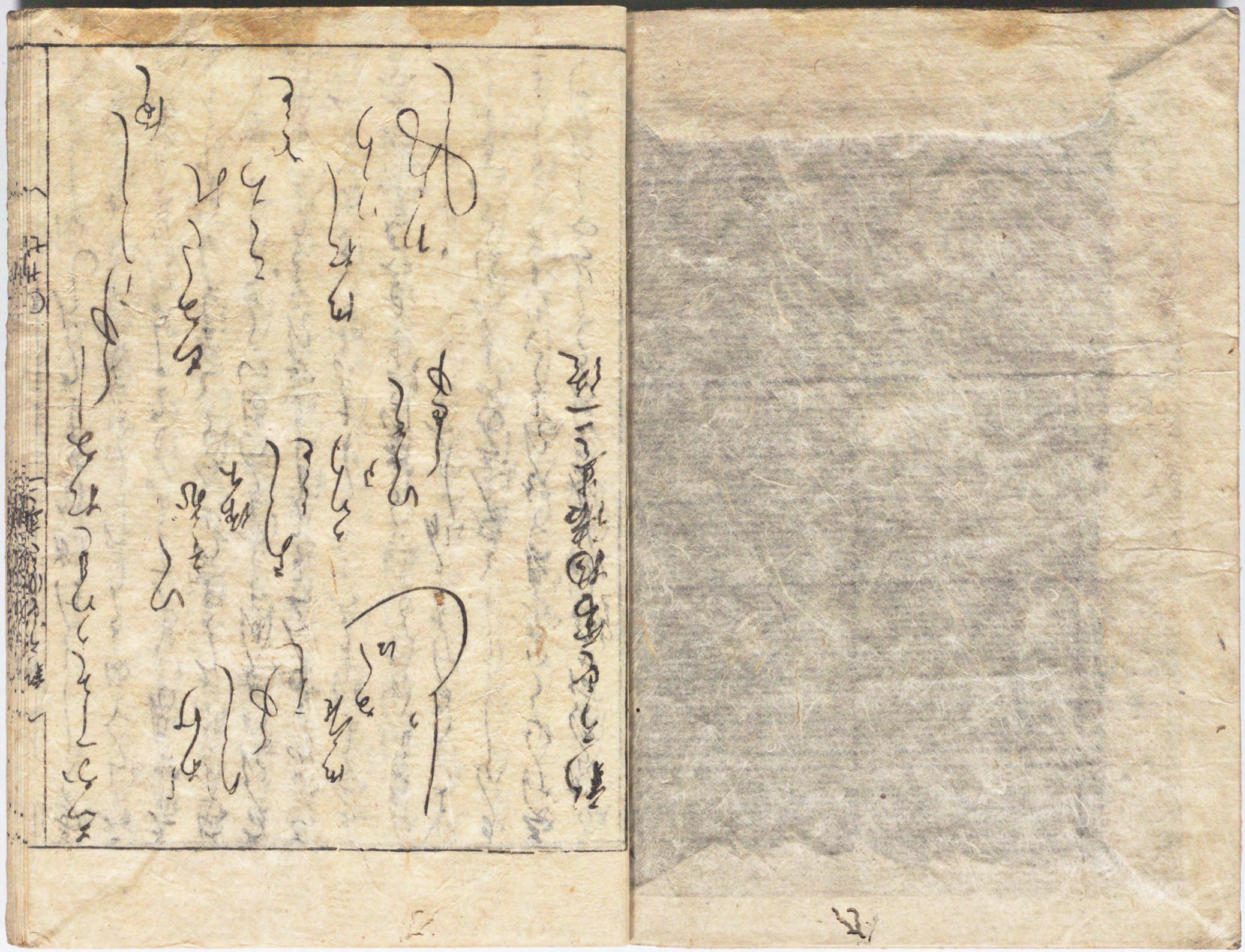


よしさらばいはじとおもひきゝてよろ夢とたのむる乃
またとよりふりこかれさくしまをしゝよそまいへの
聖しそりらんみりしこしめこし風のまふにつなれ
おもひるかけさせうの夢乃ひこのしとわかされかろ
てふかりしぬされあるしに御遊のかわり殿し
うしきいと御前よめきまし御酒みしそ殿りのかふ
そのときうつさしそへて白菊のかいしとよしけるに
下されしとのわしわか花をさりきかの白菊に
かいしにかきつけ帰りて見ゆ本をひかりに意を
うるひはいつせいものたらしそんしいうとへい
いよくも給のなまりいふしの山ましたれくへかさく
たとひのさいはとおもえしそいふし

海ともかさしとかり帆新意とゆふよそへて見ぬいは波し
うきを見れはへし　拾遺
みちのくのぬのはなへだつさく波
かれよのそへて見しうつくし色ん
たはのまさごれかぞへてのはかりへよろみかくし
ごいはくしんしとはせなうきをと
ちうしろをはからしかしたかりしかまこと
てまのかいしとらかずかいくしれそへし
まいとそへてとろくびしよりしりし
ホーとはもろしわゝれいましてと
卒の老けむ一首みくいあでてしきかて白ひ
うはそへてへしかのくきけ也そとちふおんかゝ首

れまじよりしとゐとまけあゐんやもしも奇れ
ゆへにいのしもしの長者がひとゝみえけり
地かせ給あらましきけれともをたしなめかくと
おかのしうハ琴ともをびら何ぞうべしもく
ようかかそれたいのうしせられしとまけかうハ
こやこおくかう孫んよんよういとさけりり
おひろましば夜てしのかさけハたすりわしうや
かどもなくてやこよりしあ翁ゆるゆ絶えし
のかしまへばせんさ日のまへ修かごりれしみ
老りかましいの玉れ修日かりとりけれ情乃
かりくてたましてしやしきりつれたり
婦かれうしと思ひ出く

からぼハはうかの於りしんかまとあゆくゆるやしれはし
まげもうハ奈良ともれまきけましてきしまこ
まひしりしとせんあ日のまへ修らくハきくるへ
いようあけさう所しみろく
のくらいとまし後ていあ判さ乃かやもる縁
ゑやうにまみくそし十六おくさ夜とうへて
ゑかのくせんんまうしふ女れこもりも翁平れ
おれおしはしつい日ひしかしたり
夜てふたうよのまいつとたら留ぬ中こうも
そうわしてのてをおまれきうりみく
みらと日ともりしくゆくれともしつゝ
おくしんはおがしかれゆしく



あかてそうわましたるおしゆへしし 候
おけいて まいらせ候 あらさしれ
りしよし ころとと
ゆるし よし ととと
めゑかくは うかり めかしいり
しり いろこしきゆ わかしく

新うすゆき物語巻之二終